

船越山植物観察会の報告

(昭和63年 8月17, 18日)

兵庫県立姫路西高等学校 橋本光政

内海功一先生の案内で、船越山瑠璃寺本殿の裏へ入っていった。オシダの株が葉を上開きに叢生させて、いく株も点在している。広葉樹の落葉やスギ葉が礫の上に無数に落ちている。大きめの岩面には、鈍く泥をかけられたように、また、汚れた緑の絵の具をこぼしたように、不規則な菌類の模様斑が見える。空気は冷んやりとして重たい。山原に沿って目を移すと、苔むした樹木が何本も立ち並び、岩の上に倒れた枯木も目立つ。岩は人の丈よりはるかに大きいものもあり、無秩序に集積している。その岩と岩の間からは、薄く白煙が浮き上がり、地を這いながら下ってくる。風穴からわずかずつ吹き出した冷気が霞となって周囲を覆っているようである。汗をかいた身には、そんな特殊な微気候が気持ちよい。人間の肌で感じる気温の変化である。当然、周辺の植物もその影響を受けているに違いない。オシダは本来もう少し冷温帯に近いところに多いはずが、海拔300mと少しのこの地に生息しているのもその影響とみてよさそうである。

風穴のそばを通り越して、谷を小さくひと回りした。仏炎苞はすでに中に果実をもっていたオオハング、葉は広く裏面には毛が多く、表面にも短毛をもっているケクロモジ、オオバチドメグサ、花はなく葉ばかりのヒメレンゲ、マルバマンネングサ、赤花系と白花系のあったコミヤマミズ、葉は対生で花序は満開であったイラクサ、つぼみが多く花はわずかであったカリガネソウ、など内海先生の解説に一つ一つうなずきながら、楽しく観察を終えた。

夕食後は討論会になり、それぞれ参加者が思い思いの課題を提出して、熱論を重ねた。日頃気づかなかった点、うやむやに済ましていた点など、いかに多いことかを認識することになり、原点に帰り初心を取り戻すことの大切さを感じた会でもあった。

翌朝は、再び内海先生の案内で、千種への林道に沿ってスギの親木のあるところまで、観察採集することになった。サルウの観察園までは、スギの高木を主体にした林床を歩き、深い谷底に沿って進むと、数多くの陰性の植物を見ることができた。

シダの多いことが船越山の特徴でもあるが、多くの種がすべて、広く分布しているのではなく、特定の場所に、特定の種に限られた分布をしており、過去に知られた種

を捜し出すだけでも短時日には不可能のようだ。流れの向こう岸に、光沢のよいシダが湿った岩面をびっしりとうめている。ノコギリシダの群生ということだ。道端の林床は薄暗く、その地面を覆うかのように小さな草本が群がって斑紋状に見える。花はなく、実もほとんど落ちてしまっているが、明らかに、ニシノヤマクワガタである。珍品もここまでくれば、道端の雑草である。弱いながらも日差しの届く山裾には、白い線香花火のような花序を広げたシギンカラマツも混じっていた。これも兵庫県下ではざらにない稀品種である。早春を飾るキバナサバノオやオウギカズラは見つからない。四季の移り変わりも深山の妙味であろう。

サルウの餌場付近は裸地化して、なにか異様なものすら感じる。裏山の山腹も、サルウの遊び場になっており、遊びに都合のよい木は荒され、嫌われる木の周辺はこんもりと繁っている。好き嫌いが激しいらしい。

奥の院への参道でもあり、千種への林道として通じているというが、路面はすべてイネ科やカヤツリグサ科の草本などで覆われていた。山裾には低木が密生し、その裾下は草本が叢生している。真夏の炎天下、普通なら暑さと草息れでたまらないはずである。ところが、今朝は曇ったまま、暑さもさほどでない。ある低木の下に、ひとかたまりの緑の濃い草本が他の草と一緒に群がっていた。その中に青紫色の唇形花が大きく口を開いて3~4輪。初めて出会った、むしろ、捜し求めていた花である。今までに、花のない株には2~3度出会った覚えはある。しかし、花は本でしか見たことがなかった。我も我もとカメラを向ける。接写で撮りたい。順番を待つ者、周囲の邪魔物を取り除ける者。しかし、どうもカメラに納めにくい草姿であった。その名はスズムシバナ。よく目立ち、傷がついてないときは誰もがカメラを向けたくなる花、フシグロセンノウもある。クサボタンが白い花序をつけて、巻きついている。エドビガンは最初は何かと分からなくて迷った。毛深い長い披針形の葉をもっていた。

前日に生物学会で案内いただいたとき、小休止した登山道への分岐点にきた。左へ行けば、アケボノスミレに初めて出会った谷だ。今回は千種へ通じるという右の道を進んだ。キツネノカミソリが咲いている。室井先生はオオキツネノカミソリとちがうかといわれる。なるほど、

雄しべは花被より長く突き出ている。小休止後引き返すことになったが、谷へ下りるとミヤマベニシダが大きな株をつくっていた。冷温帯近くで登場するシダである。

室井先生はすばらしくお元気である。先頭に立ってどんどん進まれる。種子採り用スギの親木まではいかなかったが、結果的に参加者全員、弁当を開いた折り返し点まで登っていた。

今年の採集会の企画は藤本先生のお骨折りで進めていただき、大変お世話になった。内海先生には、山の案内から標本の同定と、これまた大変ご指導をいただいた。室井先生はじめ、多くの先輩会員の方々からも、各種の示唆のあるご教示をいただくことができた。また、兵庫高校の鈴木先生は、若さの特権を生かして、船越山だけでなく、神戸からの道中も意義あるものにせんと、自転車をとばしての参加であった。今後も、老若を問わず、気楽に参加できる会でありたいものである。最後に、今後の生物学会の繁栄と、県下の自然保護のためにも、このような野外での研修を継続させることを念じて筆をおきたい。

次の記録は、今回の参加者名と、私の採集植物目録である。

船越山採集会参加者名簿

甘中 照雄 (福崎高)
 春名 利雄 (神戸市立教育研究所)
 北村 博史 (阪神緑地倶)
 岡村 はた (聖和大)
 藤本 義昭
 村瀬 恭紀 (新宮町教委)
 村瀬 壮史
 室井 綽 (姫路学院女子短大)
 岩谷 成彦 (県立こども病院)
 鈴木 譲 (兵庫高)
 平石 象三 (伊和高)
 当津 隆 (姫路学院女子短大)
 内海 功一 (昆虫館)
 橋本 光政
 向山 俊作 (姫路西高)
 杉田 隆三 (賢明女子学院短大)

採集植物目録

Aug.18. 1988 兵庫県佐用郡南光町 船越山
 [E134°25' : N35° 06']

16034 ササクサ
 16035 オオネズミガヤ
 16036 オオキツネノカミソリ

16037 オオハンゲ
 16038 ヤマクマバナ
 16039 アキノタムラソウ
 16040 ツルニガクサ
 16041 カリガネソウ
 16042 オオバアサガラ
 16043 ニシノヤマクワガタ
 16044 スズムシバナ
 16045 ヤノネグサ
 16046 イラクサ
 16047 コミヤマミズ
 16048 ヤブマオ
 16049 イヌショウマ
 16050 ボタンソウ
 16051 シギンカラマツ
 16052 ヒメレンゲ
 16053 フシグロセンノウ
 16054 ビッチュウフウロ
 16055 ゲンノショウコ
 16056 ツリバナ
 16057 ナガバノタチツボスミレ
 16058 コショウノキ
 16059 ケクロモジ
 16060 ケクロモジ
 16061 ヌルデ
 16062 コバンノキ
 16063 ミズタマソウ
 16064 クサアジサイ
 16065 ダイコンソウ
 16066 エドヒガン
 16067 ジャケツイバラ
 16068 ヤブマメ
 16069 ヤブハギ
 16070 フジカンソウ
 16071 ウマノスズクサ
 16072 ヒメレンゲ
 16073 ミヤマベニシダ
 16074 ベニシダ
 16075 ベニシダ
 16076 ハカタシダ
 16077 オオヒメワラビモドキ
 16078 フモトシダ
 16079 オオクジャクシダ
 16080 イワヘゴ
 16081 イワヘゴ
 16082 イワヘゴ
 16083 オシダ

- 16084 オシダ
- 16085 オシダ
- 16086 イヌワラビ
- 16087 ヒロハイヌワラビ
- 16088 タニイヌワラビ
- 16089 ホソバイヌワラビ
- 16090 ホソバイヌワラビ
- 16091 ヤマイヌワラビ
- 16092 キヨタキシダ
- 16093 キヨタキシダ
- 16094 ミヤマシケンダ
- 16095 ヌリワラビ
- 16096 ヌリワラビ
- 16097 ノコギリシダ
- 16098 ヤワラシダ
- 16099 ハリガネワラビ
- 16100 ヒメワラビ
- 16101 ヒメワラビ
- 16102 キジノオシダ
- 16103 コバノイシカグマ
- 16104 コタニワタリ
- 16105 イノデモドキ
- 16106 カタイノデ
- 16107 サカゲイノデ
- 16108 サイゴクイノデ
- 16109 アカメイノデ
- 16110 ミツイシイノデ
- 16111 イノデモドキ
- 16112 ハリマイノデ
- 16113 キヨスミイノデ
- 16114 ホクリクイノデ

〈新刊紹介〉

原色日本園芸竹筴総図説

—造園，栽培と管理，観賞法—

- ◎一流植物画家による原色図B5版35葉100種，品種
 - ◎各種群落並びに竹筴を栽植した庭園のカラー写真70枚
 - ◎専門家による鮮明な線画B5版42葉
 - ◎各種の形態，発生，遺伝系統の解説(図，写真133含む)
 - ◎造園，栽培と管理，観賞法(図，写真50含む)
 - ◎竹の生物学 形態，開花，変異，育種(図，写真30含む)
- 著者 聖和大学教授農学博士 岡村 はた
 植物画家ACC,KCC講師 小西美恵子
 名城大学農学部講師 田中 幸男
 富士竹類植物園主任 柏木 治次

日本ではこれまでに多くの竹筴に関する書物が出されているが，それらは図譜か，分類形態学か，有用竹筴の

利用か観賞，栽培，管理法かのいずれかそれぞれ別のものであった。

本書は最近40年間のこの分野の研究結果を加え，それらを一冊にまとめたもので，園芸用竹筴の図譜は他の類似のものに比し，2倍の種類を登載した。その解説ではそれぞれの形態のみならず，品種間の遺伝，発生，系統関係についても述べた。また，近時，造園に竹筴が盛んに利用されているので，造園の基本を簡単に述べ，竹筴の特徴にもとづいた植込み様式，用途別に適した竹筴の種類をそれぞれ挙げた。また，目的を達するための栽培，管理法，繁殖法など実用面について述べ，竹筴の生物学では，形態の基本的特徴を述べ，近時，明らかになった開花現象や変異の出現様式について述べ，育種に如何にとり入れるかを簡単に述べた。

園芸家，造園家，これらを専攻する学生，茶華道家，好事家，竹筴を愛好するすべての人々に広く歓迎される内容である。

内容	原色図版	B5版35枚
	原色写真(70枚)	24ページ
	線画	B5版 42ページ
	I各種解説	70ページ
	II造園	10ページ
	III栽培と管理	30ページ
	IV観賞法，楽しみ方	20ページ
	V竹筴の生物学育種	25ページ
	英文解説	25ページ
	索引	4ページ

1989年3月刊 予価7,000円 B5版約300ページ
 発行元 株式会社農村文化社

保育環境としての植物

著者 聖和大学教授 岡村 はた
 植物画家ACC,KCC講師 小西美恵子
 聖和大学付属幼稚園主事 久 洋子
 聖徳女子短大講師 久山まさ子
 柳成女子短大講師 尾上 明子

B5版95ページ 建帛社 発行 定価1,400円

幼児教育の専門家，植物画家で初等教育の専門家，生物教育の専門家がよって一冊の本を作った。

人の子を自然の中で空間的，時間的にとらえ，教育の占める位置について考えた。変化に富んだフィールドでの生きた活動例にふれることはできなかったが，親子ともどもの植物栽培を中心に保育現場での展開例を紹介し，植物を材料とした遊びのいろいろ，童話と植物，身近な植物の話題を拾った。

保育者(親をふくむ)およびそれを志すすべての人に広く読んでいただきたい書物である。